

創立者と共に 創立者の精神で —1973年 第二回滝山祭を中心に—

三 好 健 洋

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました1期生の三好健洋と申します。きょうは創価教育研究所から光栄にも、草創のころのことを話すように、とのお誘いを頂きまして、喜んでこの場に來させていただきます。こういう機会を与えてくださった、創価教育研究所の神立所長をはじめ関係者の皆さまに、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

神立所長からもお話がありましたように、1期生、2期生の入学式には、創立者池田先生はご出席になりませんでした。1973（昭和48）年4月9日の3期生の第三回入学式に初めてご出席になり、あの歴史的な創立者講演を頂いて、本格的に創価大学の建設がスタートしたと思います。そういう草創の時代に生きた私たちが当時の話をすると、三日三晩かかっても話が終わらないのではないかと思います。創立者のもと、草創の創大建設の中で、私たち学生がどういう思いで活動したか、創立者がどのように私たち学生に接してくださったか、当時の学生一人一人にそのストーリーがあると思います。私も、創大建設の源流の時代に、一人の学生として創立者を求め、多くの友人と共に生きることができたことは、本当に幸せでした。よくぞあの時代に創価大学に集い、自らを訓練することができたと感謝の思いでいっぱいでございます。

さて、表題を「創立者と共に 創立者の精神で—1973年 第二回滝山祭を中心に—」とさせていただきますが、4年間を語れば話が尽きませんので、私が現在の創価大学理事長の田代康則さんから滝山寮全寮代表のバトンを受けた、1972年の末から1973年7月の第二回滝山祭までを中心に、当時を生きた学生の一人として話をさせていただきたいと思います。

1973年といえば、円の変動為替相場制移行、第一次オイルショック、ベトナム戦争終結を約したベトナム和平協定（パリ協定）の調印などがありました。前年の1972年には、沖縄が日本に復帰。札幌冬季オリンピックの開催、また2012年に40周年を迎える、日中国交正常化をうたった日中共同声明が調印されました。教育界にあっては、1968年ぐらいから、大学紛争が非常に過激になり、1969年には東大の入学試験が中止になるなど、全国の大学が大変に荒れた時代でした。

Miyoshi Takehiro（創価大学法学部1期生、第2回滝山祭実行委員長）

* 本稿は、創価教育研究所講演会での講演（2011年7月1日）に加筆・訂正したものである。

そういう中で、創立者は1964年に創価大学の設立構想を発表され、1971年4月2日、創価大学が開学。4月10日、1期生が入学しました。まさに荒廃した教育界の真ただ中で、創価大学は産声を上げたと思います。その3年前の1968年には、創価学園が小平市に開校し、創立者の教育改革が着手された時代であったと思います。

創大建設 最初の2年間

〔1971年〕

初めに、私の体験も交えながら、1973年を迎えるまでの創価大学の2年間で少し振り返ってみたいと思います。

先ほども申し上げましたように、1971年4月10日の第一回入学式には、創立者を求め、北は北海道から南は九州・沖縄まで全国各地から学生が集ってまいりました。ところが、創立者はご出席されず、学長中心の寂しい式典でした。こう感じたのは私だけではなかったと思います。ほとんどの1期生がそう感じたのではないのでしょうか。

ただ、私が創価大学に入学できた喜びを感じることができたのは、創立者が寄贈された一对のブロンズ像の台座に刻まれた言葉を目にした時です。

ブロンズの言葉とは、皆さんもご存じの次の「二つの永遠の指針」です。

「労苦と使命の中にのみ 人生の価値は生まれる」

「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」

私は、創立者にお会いしたような気がして、希望と勇気がわいてまいりました。

創価大学に入学してよかったと思いました。

そうした中、何としても、創立者にお会いしたい、お迎えしたい、との思いが滝山寮生の間に生まれ、現在のアメリカ創価大学学長の羽吹好史さんを実行委員長として、7月3日、滝山寮の建物の裏側にある広場で、“滝山寮夏祭り”が開催されました。全国各地から集っている寮生たちが、学部も、クラスも、寮の部屋も関係なく出身地ごとに集まって、“オラが故郷の盆踊り”を披露し合うというものでした。寮生同士の人間関係が広がり、また深まった、本当に楽しい行事でした。

九州・福岡県出身の私は、同郷の友と一緒に炭坑節を踊りました。北海道の人はソーラン節を、四国の人は阿波おどり、東京の人は東京音頭を踊っていました。この夏祭りには、創立者をお迎えすることはできませんでしたが、創立者をお迎えしようという皆の意志が固まり、団結できた夏祭りであったと思います。翌1972年7月に、創立者をお迎えして開催された第一回滝山祭への助走として、有意義なイベントであったと思います。

71年秋には、第一回創大祭が行われました。初めて私たち学生が企画し開催した行事に、創立者をご出席くださったのです。今でも本当に深い印象が残っております。きょうは滝山祭の中

心にお話をしますので、あまり詳しい話は致しませんが、私はその時に感じたことを一言申し上げたいと思います。

私たち学生は、中央体育館に集合し、静寂のなか、その時を待っていました。司会の第一声とともに、その瞬間がついに訪れました。創立者が入場されたのです。その時の印象は、参加者全員がそれぞれもったと思いますが、私は本当に今でも忘れません。真っ暗闇の中に太陽が昇ってきて、周囲がパーっと明るくなったような感じでした。会場では、創立者をお迎えした歓喜の拍手が鳴りやみませんでした。今でも瞼の奥に焼き付いておりますし、耳の奥にその拍手の音が聞こえてくるかのようです。

〔1972年〕

翌72年4月、2期生の第二回入学式にも、創立者をご出席になりませんでした。そこで、第一回滝山祭には、何としても創立者をお迎えしようという機運が大きく盛り上がりました。田代全寮代表を中心に団結し、創立者を何としてもお迎えするぞ、と一切をそこに焦点を当てて準備をし、7月6、7日に第一回滝山祭が開催されたのです。その記念フェスティバルに、創立者は、大勢のお客さまと共にご出席になりました。

私にとっても思い出深い第一回滝山祭について、少し話をさせていただきます。

私の居た寮の部屋は模擬店を企画していました。おにぎりを作って、売って、儲けて、楽しく打ち上げをしようというものです。同室のみんなで準備にいそしんでいたある日のこと、創立者をお迎えする記念フェスティバル部門の責任者だった羽吹さんが、私の居る部屋を訪れました。私に「記念フェスティバルを一緒にやろうよ」と誘うのです。私は部屋の企画を語り、抜けるわけにはいかないと言いました。すると羽吹さんは「創立者をお迎えするための、この第一回滝山祭の記念フェスティバルは、本当に大事なんだ」と熱っぽく語るのです。私は同室のメンバーに相談しました。すると皆、「頑張れ」と快く送り出してくれたのです。「おにぎり」から抜け、記念フェスティバル部門で頑張ることになりました。

創立者をお迎えする部門での活動が初めての私は、少し戸惑いながらも羽吹さんを中心に企画を立て、準備に全力を傾注しました。滝山祭本番の1週間ぐらい前に、羽吹さんから「司会をやってほしい」と言われました。私は創立者をご出席の会合での司会はしたこともないし、あまりにも荷が重いのでお断りしました。しかし、羽吹さんの情熱と責任感に感動し、結局、司会をやらせていただくことになりました。私にとっては一大決意です。式次第も決まり、「司会原稿を書いてほしい」と言われ、私は書きました。それを見せると羽吹さんは「これでいい」と言うんです。羽吹さんは相手を尊重する人ですから、まず、認めてくれるんです。私はこれでは心配だと言うと、「じゃあ、実際にやってみよう」とリハーサルをすることになりました。羽吹さんと一対一で。

皆さん、中央体育館に野外音楽堂があったのをご存じですか。実は記念フェスティバルは最初、

野外音楽堂で行うことになっていたんです。その野音で、司会の立ち位置を決めてリハーサルを始めました。羽吹さんから「もっと顔を上げたほうがいい」とか、「その言葉はやめて、こういう言葉にしようよ」などと、いろいろチェックが入りました。終わってみると、元の原稿は全く跡形なし。短時間で、最初のものよりずっといい司会原稿が出来上がっていました。その時私は「羽吹さんはすごい人だ」とびっくりしました。それをさらに練り直して、ようやく本番を迎えました。

ところが当日、雨が降ったのです。野音で行われる予定が急きょ、中央体育館に変更になりました。リハーサルが何の役にも立たなかったんです。中央体育館で、司会の立ち位置に立ってみると、全然、風景が違います。緊張の度は高まる一方です。創立者が入場され、記念フェスティバルの開会です。私は無我夢中で、司会の第一声を放ちました。創立者への御礼と感謝のごあいさつを申し上げた時、創立者と目が合いました。不思議にも、私はその直後から落ち着きを取り戻しました。

マイクを取られた創立者は、滝山祭の「滝」にちなみ、奥入瀬の溪谷に立ち寄られた際に撮影された滝の写真とともに友人に贈られた、次の一文を紹介されました。

「滝の如く 激しく
滝の如く 撓まず
滝の如く 恐れず
滝の如く 朗らかに
滝の如く 堂々と
男は 王者の風格を持て」

この詩に曲が作られたのですが、私はこの詩が大好きで、いつも口ずさみながら、勇気を出しています。

記念フェスティバルでは、東寮、南寮、中寮、北寮の各寮歌の発表もありました。創立者は、校歌、寮歌は、建学の精神や学生たちの心意気の表現であり、魂の叫びである。人の心に入っていかなければならない、みんなに愛され、親しまれなければならない、という趣旨のご指導をしてくださいました。

私は生まれて初めて、創立者の前で司会をさせていただくことができ、一生の思い出をつくらせていただきました。

こうして第一回滝山祭を大成功に終え、創価大学の伝統の確かな一歩が刻印されました。秋には第二回創大祭が開催され、創立者をお迎えすることができました。創立者のもと、創大建設が確かなうねりとなって前進し始めたと思います。

72年の秋、私は滝山寮の全寮代表になってしまいました。「なっていました」というのは、私は全く考えてもいなかったからです。前の全寮代表の田代さんの包容力豊かな、粘り強い説得を受けて、田代さんが全面的に支えてくれることを条件に、やらせていただくことになったので

す。しかし、翌年の第二回滝山祭について、創立者が「来年はもっと盛大にやろう」とおっしゃったということをお聞きし、自分が本当に全寮代表の責任を全うできるだろうか、というのが私の率直な気持ちでした。

当時の滝山寮は、翌年の新入生を迎えるに当たって、各部屋に二人ずつの残寮生を置く体制を取っていました。年末には、先輩として、新入生をいかに迎え、面倒を見ていくかということについて皆で話し合い、決意し合う残寮生研修を行っていました。この年の残寮生である私たちも、新入生を迎えるために真剣に研修を行い、万全の準備を整えました。

1973年 第三回入学式

1973年が明けました。年頭に、素晴らしいビッグニュースが入ってきました。それは、第三回入学式に、創立者のご出席になるというニュースです。本当に待ちに待った、創立者ご出席の入学式。私たちは飛び上がって喜びました。本当にいよいよだな、まさに私たち1期生、2期生にとっても、自分たちの本当の入学式を迎えられる、そういう思いでした。

3期生は、“本門の1期生”だと、かつて創立者は言われたことがあります。創価大学の開学は1973年に、という考え方があったということです。しかし、大学紛争に揺れていた時代に一日も早く、真の学問、教育の場を出発させたい、という考えから予定を早め、1971年に開学したということをお聞きしました。ですから本来1期生になるはずの3期生は大事な人たちだ、と思っていました。

世間では、当時の大学の入学式は、各大学の教職員が運営し挙行する式典なんです。ところがその式典を、創価大学は学生参加、学生主体の大学ですから、その意義から学生が運営していこうということになり、羽吹さんが第三回入学式実行委員会委員長になりました。「私たち寮生はいかにして3期生を迎えるべきか」を真剣に考えていた私は、入学式の準備から3期生を迎える戦いをしようと決意し、羽吹さんのところへ飛んで行き、「ぜひ、実行委員会に入れてほしい」と、私の思いを伝えました。羽吹さんはすぐに了解してくれました。

こうして羽吹実行委員長のもと、一人の2期生と共に私も副実行委員長として、学生主体の入学式の準備が始まりました。入学式の日程が4月9日と決まり、「4・9入学式実行委員会」と私たちは呼んでおりました。その4・9入学式に向けて、羽吹実行委員長の斬新なアイデアを生かしながら、私たちは毎日、真剣に準備に力を注ぎました。一方、滝山寮では、どうやって新入生を迎えるかについて考え、議論をし、体制を整えながら、いよいよ「4・9」入学式を迎えました。

創立者が初めてご出席になった入学式は、過去2回の式典とは違い、心躍る、希望あふれるものでした。さまざまな式次第の後、いよいよ待ちに待った創立者講演。私は、3期生と同じ気持ちで、今、初めて創価大学の入学式を執り行っているという思いで、創立者のご講演を拝聴しました。恐らく多くの1、2期生がそうだったのではないのでしょうか。

ご講演では、大学が歴史上、社会にいかに大きな影響を与えるかを論じられた後、14、5世紀

ごろのルネサンスをもたらした背景には、中世における「学問の大復興」があり、その時にパリやボローニアに大学の発生があったことを明らかにしてくださいました。さらに、インドのナーランダ大学、プラトンのアカデメイア、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学など人類の営みにおける大学の歴史的役割を明らかにされ、それらの大学には哲学、思想のバックボーンがあり、生命哲学、創価哲学を根本とし人間学の完成をめざす創価大学の歴史的 position 付け、人類の幸福と平和に対する使命の大きさを教えてくださった、と理解しております。そして「創造的人間であれ！」という創価大学の永遠のモットーを示してくださり、私たち創大生の生き方、生きる道を教えてくださいました。

この第三回入学式を踏まえた翌年の第四回入学式の創立者講演は、「創造的人間」であるためには、「創造的生命的開花を！」とのご指導であったと思います。ご講演を少し引用させていただきます。

「諸君は、断じて新たなる“生”を建設する行為を、一瞬だにもとどめてはならない」「極言すれば、宇宙の神秘的扉を開くよりも『汝自身の生命の門戸』を開くことのほうが、より困難な作業、活動であります。／しかし、そこに人間としての証がある。否、生あるものとしての真実の生きがいがあり、生き方がある。“生”を創造する歓喜を知らぬ人生ほど、寂しくはかないものはない」「創造的生命的こそ、人間の人間たるゆえんである」「この“創造的生命的”の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題」と創立者のご指導くださり、創造的人間であり続けるための根本の戦い、生き方を教えてくださったと思います。この第三回、第四回の入学式の創立者講演は、私の生涯の指針としています。

「4・9」第三回入学式が終了した後、私たち寮生は、滝山寮中寮広間で新入生歓迎の全寮大会を行いました。私は創立者のご講演を思い出しながら原稿を書き、3期生への歓迎の意を表す話をさせていただきました。いよいよ1973年度の滝山寮生の創大生活のスタートです。どの新入生も、創立者を入学式にお迎えし、創大生として希望と使命に胸を膨らませ、輝いて見えました。

新入生が大学生活、寮生活に慣れたと思われる、入寮して約1カ月後の5月15日、滝山寮において、第二回滝山祭実行委員会が発足しました。実行委員会の体制、テーマ、内容、日程など、皆で話し合い、一つ一つ決めていきました。もちろん、すんなり決まったわけではありません。8回の実行委員会を開き、それも、深夜1時、2時まで討議を重ねました。その結果、日程も7月13、14、15の3日間と決まり、滝山祭の全貌が明らかになりました。あとは一つ一つ磨き上げ、具体化していけばいいわけです。

創立者ご来学

そのような状況の中、6月の13、14日、創立者が、約40日間のヨーロッパの旅を終えられ、

帰朝報告のため来学されたのです。その際、創立者よりさまざまなお話がありました。パリ大学をはじめ、イギリスのサセックス大学などを公式訪問され、さまざまな方々とお話をする中で、「どこの大学も教授と学生たちとの人間関係に悩んでいた」「一にも二にも大事なことは、人間教育であるという結論であった。」と述べられました。そして、「創価大学の創立者として考えていたことに間違いはないという確信を深めた」という趣旨のお話をされました。

6月13日夕、私は、大学構内にある「万葉の家」で行われた、創立者との懇談会に参加させていただきました。参加者は大学の教授などで、学生は私を含めて3人でした。懇談の終わりごろ、私は創立者に呼ばれまして、創立者のおそばに座りました。創立者は「滝山祭の準備は進んでいるか」と聞かれました。私は夢中でご報告をしました。「そうか、そうか」と創立者は何度もうなずきながら聞かれました。

私のご報告を聞いていただいた後、創立者が「また、記念講演をしたいんだけど、してもいいかな？」とおっしゃったのです。「するよ」じゃなく「してもいいかな？」でした。私はもう本当にびっくりしたというか深く感動いたしました。創立者はそこまで学生を尊重され、大事にされているわけです。「ぜひお願い致します」と私は即座に申し上げました。「そうか。じゃあ『スコラ哲学と現代文明』というタイトルでやりたいと思う」と創立者はおっしゃいました。「本当にありがとうございます」と私は即座に申し上げました。学生主体ということがどういふことを、創立者は教えてくださったのだと思います。

その瞬間から、創立者をお迎えする記念フェスティバル部門は、創立者記念講演部門となり、第二回滝山祭が歴史的な大学行事となりました。創立者は「滝山祭に行くよ、3日間行くよ」とおっしゃいました。これはもう、滝山寮生にとって、全創大生にとって大ニュースです。7月13日から始まる滝山祭のちょうど1カ月前の6月13日のことでした。

その日の夜の緊急全寮大会は爆発的な盛り上がりを見せました。既にそのビッグニュースは、寮生全員に伝わっておりましたので、いつもの全寮大会とは違い、滝山寮中寮広間は隙間がないほどぎっしりと寮生で埋まりました。あんな熱気に包まれた全寮大会はかつてなかったと思います。私は寮生に創立者のお話を報告し、「いよいよ滝山祭が本格的にスタートすることになりました。何があっても団結して、断じて大勝利しよう！」と真剣に訴えました。寮生の瞳は爛々と輝き、身を乗り出して私の報告に一点集中、ものすごいエネルギーでした。この全寮大会で滝山寮は一変しました。私は1カ月間、何があっても、どんなことをしても、滝山祭の大成功のために戦うぞ、大勝利するぞ、と深く決意を固めました。恐らく、寮生全員がそのように決意したと思います。本当の滝山祭が始まったのです。

滝山祭当日の準備をするだけでは意味がありません。創立者をお迎えする準備の中で寮生一人一人が大成長しなければならないと思いました。そこで実行委員会のメンバーと相談の上、私は

寮生に訴えました。「行学の二道をはげみ候べし」とあるように、学びながら準備をし、準備をしながら学び、滝山祭を大成功させようと。何を学ぶか。すなわち4・9入学式の創立者講演と『人間革命』（第1巻から聖教新聞連載中の第8巻までの）読了運動を打ち出し、創立者の思想・哲学を学ぼうと訴えたのです。全寮に学習運動がみなぎり、そのエネルギーで、滝山祭成功へ向けての具体的な作業に邁進しました。

ちなみに、創教研の塩原さんはその時の副実行委員長です。もう毎晩のように、私が寝ているベッドルームに来て、「こういう企画はどうか」「ああしたらどうか、こうしたらどうか」と思いついたことを話すのです。彼は必ず真夜中に来るのです。私の睡眠を邪魔する張本人だったわけです。ところが、時々いいアイデアや意見を持ってくるので、私も起きなきゃもったいないと思い、起きて話をすることになるのです。それは滝山祭が終わるまで、ほとんど毎日続きました。

先ほどお話ししました6月13日の懇談会の後のことです。お茶室で創立者とご一緒にお茶を頂いたのです。一人の学部長と私を含め学生3人がその時の参加者だったと思います。創立者からいろいろなお話がありました。お茶の作法はよく分かりませんから、どうしようと思っていましたら、おいしく頂けばいいんだと言っていたいただき、ほっとしました。

お茶をおいしく頂いた後、「万葉の家」の庭に出ました。そして、どういうわけか気が付いたら、創立者にお供して歩いていたのです。歩きながら創立者は、当時、『大白蓮華』に連載中の「生命を語る」に関する話をされました。創立者は「読んでるか」と聞かれました。私たち寮生は各部屋で勉強しておりましたので、「みんなで勉強しております」とお答え致しました。「生命を語る」の中に、ある言葉が出てくるのですが、創立者はその言葉を引かれて、「その言葉を覚えているか」言われました。私はその言葉が印象に残っていたもので、「覚えております、こういうところに出ていたと思います」と申し上げたところ、「そうだ、その言葉だ」とおっしゃって、「あの言葉は、世界で初めて私が使ったんだよ」とおっしゃいました。ところが、すぐ後に外国の学者が、その言葉を使ったそうなのです。創立者は「本当にちょっとした差だったんだ。世界というのは、そういうふうには、言葉一つでもすさまじい勢いでしごきを削っている。だからスピードが大事なんだ。迅速にやらなければいけない」という趣旨のお話をされました。私は本当に大事なご指導だと思い、心にととどめました。

6月13日、創立者が第二回滝山祭にご出席になるという大ニュースが全学に流れた後、学生の間でさまざまな動きがありました。滝山寮以外の男子学生が住んでいる丹木寮、八王子寮、創大生だけが住んでいるアパート・青葉荘などから、「俺たちも参加させてくれ」という申し出があり、実行委員会に参加を了承しました。また、女子寮の加住寮、豊田寮や女子学生が住んでいたイリヤツ荘からも参加申し込みがありました。これらは、寮祭の主体者としての参加という意味です。女子寮にいたっては、加住寮の寮長、豊田寮の寮長が参加を希望する嘆願書を持って来られました。真剣な目つきです。嘆願書を受け取り、返事は実行委員会に諮ってからとの了承を

得て、緊急の実行委員会を開き、みんなの意見を聞きました。多数決を取り、圧倒的多数で女子寮参加が決定。早速、電話で女子寮に参加決定の報告をしたところ、電話の向こうから、すごい歓声が伝わってきました。

第二回滝山祭は滝山寮以外の男子寮、女子寮などを加えて大軍団になりました。後に大学内のクラブも模擬店などで参加することになり、全学挙げての行事になったのです。

〔豊田ジャーナル〕

今、私の手元に、当時の女子寮の豊田寮で作っていた「豊田ジャーナル」という新聞があります。発行するたびに、滝山寮に届けてくれたのですが、当時の雰囲気をお知らせするために、抜粋になりますが、ちょっと紹介させていただきたいと思います。

紙面にはまず「滝山祭運動を巻き起こそう！」という、大きな見出しが躍っています。そして小見出しに「やるぞ！ 滝山祭！」。自分たちが主体者だという自覚です。

そして本文の初めには、「去る6月21日午後6時25分より、S201教室において、第1回全寮大会が開かれた。終始大きな盛り上がりを見せ、滝山祭に向けての新たなる前進の契機となった。まず武田節、学生歌に始まり、キャップ紹介、個性豊かな各寮アピールと続いた」とあります。

次に、「塩原滝山祭副実行委員長が、6月13、14日の創立者のご来学の模様を話し、(中略)創立者のお言葉などを報告した」。

続いて「第1回滝山祭実行委員長であった田代さんが、初年度からの創大建設の流れを話され、最後に、『我々はあまりにも恵まれすぎている。それに甘えてはいけないのだ。』と強く訴えられた。創立者に甘えていて、創大建設はできない。『私たちが創立者だ』と創立者は言われた。その姿勢で私たちはやっていかなければいけない、と訴えた」。

さらに記事は続きます。「高村副学寮運営委員長が挨拶をし、『創大生はかわいくて、かわいくて仕方がないんだ。』という創立者のお言葉を紹介し、『今は貧乏で苦しんでいる学生がいるかもしれない。地道に戦っている人もいるかもしれないが、21世紀には創価大学から必ず世界の指導者が出ることを、確信している。』という創立者のお言葉を伝えられ、参加者一同、創立者のお心にお応えしようと、燃え上がらばかりの熱気に包まれた。誰の顔も紅潮し、話された言葉の一言一言をかみしめているようであった。」とあります。

そのあと、「篠原誠学寮運営委員長(当時の創価大学学生部長)が、創立者の『寮祭の時には、各寮へ、特に女子寮を回りたい』とのお言葉を伝えるやいなや、場内は歓声の渦に沸き返った。そしてまた、『寮祭には創価学園および、創価女子学園から代表が来るが、弟や妹のような気持ちで迎えてもらいたい。そしてこの3校は互いに交流していきなさい』という創立者の意向を話され、さらに、『3日間やるのか。3日間とも出ようか』とさえ言うてくださった。創大生を我が子のように、面倒を見ようという慈父のようなお心を感じずにはいられない。ともかく、疲れすぎないように、絶対に創立者にご心配をかけない寮祭にしていこうではありませんか」と。

そして最後に、「第二回滝山祭実行委員長である三好さんから力強いアピールがあった。その中で……。最後にシュプレヒコールを行い、学生歌を大合唱して全寮大会は7時55分に終了した。」と書いてあります。

滝山祭を大成功させようとする女子寮の熱気あふれる新聞を、ちょっと長かったですが、雰囲気を知っていただくために、紹介させていただきました。

滝山祭前夜

そういう盛り上がりの中で、第二回滝山祭は前進していきました。そして、いよいよ7月13日を迎えるわけです。その間、創立者から寮生に対して、お団子を頂くなど、何度も何度も激励を頂きました。そのたびに私たち寮生は、創立者のお心にお応えしようと深く決意し、大成功へ向けて懸命に準備を進めていきました。

7月8日、再び、創立者との懇談会に参加させていただきました。創立者のご指導を伺い、断じて滝山祭を大成功させるぞと、深く深く決意しました。この日は、私にとって生涯忘れられない原点の日となりました。

7月12日、滝山祭開幕の前夜、大きな満月が夜空に浮かんでいました。突然、創立者に呼ばれて伺ったところ、浴衣をお召しになった創立者は、ゆったりと籐椅子にお座りになり、奥様と一緒にいらっしゃいました。私は緊張して創立者のおそばに伺いました。創立者は、「準備はどうだ」と聞いてくださり、私は、ありのままを一生懸命にご報告させていただきました。創立者は、さまざまなご指導をしてくださり、私は再び深い決意を胸に秘め、お暇いたしました。

第二回滝山祭の開幕

ついに、第一日目の7月13日が明けました。いよいよ第二回滝山祭の開幕です。素晴らしい晴天に恵まれました。最高気温が30.5度という夏らしい天気です。この日まで、全寮生が大成功をめざし、一丸となって真剣に準備を進めてきたのです。寮生は皆それぞれの思いを抱き、この日を迎えたと思います。

ここに、第二回滝山祭の顔ともいべきゲートを、徹夜で作っていた設営部門のキャップであった一人の三期生が、当日の朝を迎えた心情を書き記した一文があります。当時の寮生の心情を表すものの一つとして、その一部を紹介させていただきたいと思います。

次のようなものです。

「ゲートはまだ半分しかできあがっていなかった。明日は、待ちに待った第二回滝山祭という、深夜3時ごろであった。連日の作業に、仲間達の体力も気力も、極限に近かったように思う。作業は遅々として進まない。不安と焦りとが、ますます悲壮な思いをかきたてる。その時、それまでの2週間、一滴も降らなかった雨が襲ってきたのである。まだペンキも塗っていない。寮祭の顔ともいえるゲートである。創立者にご心配をかけてしまう。寮のみんなに申し訳ない。しかしもうダメだ。友の顔は、無念さにひきつっている。先輩達が激励に駆けつけてくれる。押しつぶ

されるような絶望感に、すべてを投げ出したくなる思いを懸命にこらえながら、雨のやむのを祈っていた。ベニヤ板に当たる雨の音は、今も忘れられない。

1時間も過ぎたろうか。ゲートの下から飛び出して見上げた空に、素晴らしい満月が輝いていた。晴れた！ やったぞ！ さあ頑張ろう！ 重い体を引きずるようにして、再び作業が始まった。創立者に見ていただく。みんなに喜んでもらおう。全員、必死の思いであった。その思いが通じてか、作業は思わぬはかどりをみせた。そしてついに、誰もが出来上るとは考えていなかったゲートが完成したのである。全てが終わって、仲間たちは道の上に無言で座り込んでいる。友の真っ黒な顔と白い歯が印象的だった。ちょうどその時、開祭を告げる花火が鳴り渡ったのである。(寮の) 部屋のベランダから、解放感にひたりながら、喜々として動く寮生や、楽しそうな子供たちの姿を眺めていると、涙が込み上げてきて仕方がなかった。友のありがたさを知り、団結の力を実感した。そして、今までとは違う新しい自分を発見した喜びに満ちていた。」

以上が滝山祭開幕の朝まで、徹夜で準備に没頭した一人の寮生の心情をつづった文章の一部です。

13日 滝山祭1日目

〔創立者講演〕

滝山祭1日目の13日午後、中央体育館で、創立者記念講演が「スコラ哲学と現代文明」と題して行われました。約45分間にわたる歴史的なご講演です。参加者は、1年生から3年生までの創大生、創価学園生、創価女子学園生（現在の関西創価学園）、そして教職員など、計約4500人が参加をいたしました。この講演は、皆さんも学んでいると思います。

記念講演では、「スコラ哲学」は中世暗黒時代の象徴ではなく、むしろ近世、近代の出発点である、ととらえ直され、スコラ哲学の時代に、ヨーロッパ文明の原型が実質的に完成し、ルネサンス、宗教改革、ナショナリズムの勃興など、幾多の変遷を重ねながら、現代文明が築かれたと論じられました。その現代文明が行き詰まりを見せている今、新しい大学、新しい哲学の興隆が必要であることを訴えられました。

そしてこの新しい哲学を探究し、教養を実践する人間と人間の集いが真の意味の大学である。現代に耐え得る、現代を導くに足る力ある哲学の樹立、その基盤をなす宗教の確立こそ緊急事であり、それを基盤にした学問を創造し、新たな人類の文明を築いていくことが大学の使命である。その使命を担う大学こそ創価大学である、という趣旨のお話だと私は受け止めました。創価大学の永遠にわたる使命を創立者は教えてくださったと思います。

創立者のこのご講演の前に、学長のあいさつがありました。私も実行委員長として、第二回滝山祭宣言をさせていただきます。その宣言のエッセンスが、「創立者と共に、創立者の精神で私たちは創価大学を建設し、創価大学生として生きてまいります」というものでした。

〔喫茶・ロンドン〕

「スコラ哲学と現代文明」のご講演が終わった後、創立者をご案内して、喫茶・ロンドンに向かいました。体育館から出られたときの創立者の第一声、これも忘れられないお言葉です。「みんな眠そうだったな」「みんな眠いのを必死にこらえていたな」と、笑われながらおっしゃいました。寮生が13日当日の朝まで、寝ないで準備をしていたことを、創立者はよくご存じだったのです。私も他の寮生と同じように最後の1週間はほとんど徹夜に近い毎日で、必死に眠気と闘っていた一人でしたので、創立者のお言葉が本当に身に染みました。

喫茶・ロンドンでは、学生をはじめ多くの人が集まっていました。コーヒーを頂きながらの懇談でした。「(講演は)みんな分かったかな? みんな、昨日は遅くまで準備して眠そうだったな。みんな、本当に頑張ったな」。「私がなぜ、このような内容の話をしたか、それは諸君たちに文明論や歴史観の重要性を知っていただきたいからです。これらを学ぶことは、人間の本质を深く掘り下げ、理解するうえでの、ひとつの方法です。諸君たちが大学で学ぶ学問を、単なる知識の範囲だけにとどめず、人類に貢献するものとして生かすには、こうした観点からの洞察力を持たなくてはならないのです」。創立者はこのような趣旨のお話をされました。

また、世界各国における平和の戦いについての質問にお答えになったり、年配の方に対して「若い人と接した方がいいよ。私は常に学生と接しているから若いんだ」。そして、「あの講演がスラッと分からなくちゃ、一流じゃない。経済でも政治でも、中世から入る」「あの講演を普通通り話せば、5時間くらいかかる。入学式は2時間くらいかな」。そのように言われながら、「あの原稿は、13日の朝、できたんだ。今日の話は、付け焼き刃では分からない。(キリスト教は)唯心論であり、仏法は色心論である。十分勉強していきなさい」。そのように話されておりました。

また、「勉強しなくてはいけない。骨髓というものを、勉強していかなければならない」「文明論をやりたいなあ。文明論は人間主義だ。それが分からないと世界の指導者にはなれない。私は、戸田先生から毎朝、こればかり習ってきた。大学に文明論的歴史観がないと、他の学問が生きてこない。何を骨髓とするかが問題なんだ。」このような趣旨のお話をされました。

〔三校交歓会〕

この後、私たち学生は喫茶・ロンドンから、第一回三校交歓会が行われる大学の一室に移動しました。三校交歓会といいますのは、創大生と、創価学園生、創価女子学園生の代表22名が集い、交流を図るもので、初の“創価教育同窓の集い”といえると思います。これは、創立者講演「スコラ哲学と現代文明」の冒頭で「本日は、諸君の学園の弟、妹達がたくさんみえております。兄さんとしてよく交流し、立派に見守ってあげていただきたい」と述べられた意義を踏まえて行われたものです。

この第一回三校交歓会について、少し話をさせていただきたいと思います。

交歓会ではまず、それぞれの自己紹介、愛唱歌の披露、記念品の交換を行いました。創大生から、創価学園生と女子学園生に贈ったものは、第二回滝山祭記念のコーヒーカップと記念のうちのわです。

女子学園は、この年（昭和48年、1973年）に開校したばかりですから、高1、中1の生徒しかおりません。代表があいさつをしました。「お招きありがとうございます。感謝の気持ちを込め、大変に少ないのですが、学園の菜園で採れた野菜とアサガオをプレゼントしたいと思います」と述べ、記念に下さいました。菜園で採れた野菜とは、トマト、キュウリ、ナスの3種類で、4個ずつありました。高校生と中学生が作った真心の野菜です。

私は「寮生は栄養不足で悩んでおりますので、これを栄養源にして、元気に頑張っていきたいと思います」と、お礼を述べました。初めての三校交歓会は有意義な、心の通い合う、楽しいひと時となりました。

14日 滝山祭2日目

〔創立者、滝山寮へ〕

2日目の14日。最高気温は、1日目よりも上がって32.7度。本当に暑い一日でした。この暑さの中、私たちは滝山寮に創立者をお迎えすることができました。

ポロシャツを着られ、麦わら帽子をかぶられた創立者がゲート前に到着されました。そこには鉢巻をし、わらじを履いた浴衣姿の屈強な4人の寮生が、手作りの駕籠を用意してお待ちしておりました。駕籠というのは、江戸時代に人を乗せてエッホ、エッホと掛け声を掛けながら走る、あの乗り物です。安全を期して前に2人、後ろに2人の担ぎ手を配しておりました。

創立者がお着きになるや、彼らは創立者に「どうぞ、お乗りください」と申し上げました。「大丈夫かな？」と思いますよね、誰でも。その場の雰囲気を感じた“駕籠屋”さんは「寮が一番重いやつを乗せました。大丈夫です」と言うのです。創立者は乗っていただきました。そして目的地の滝山寮まで、エッホ、エッホと駕籠屋さんは安全第一に創立者をお運びしました。私たち実行委員会のメンバーも駕籠の周りを囲みながら一緒に移動しました。そして無事到着したのです。

「着いたね。ちゃんと着いたじゃないか。ありがとう。生涯、こういうふうに担いで行ってよ」と創立者はおっしゃいました。私たちは元気いっぱい「はい！」と返事をしました。

その駕籠は寮生によって「諸天の駕籠」と名付けられていました。

駕籠を降りられた創立者を、数人の学生がお待ちしておりました。「先生、彫刻を作りましたので、除幕をしてください！」。創立者は快く応じてくださいました。その彫刻は、肩を組み、励まし合っているような姿の学生の像でした。その一人は空に向かって指をさしています。

学生たちはさらにお願ひしました。「先生、この彫刻に名前をつけてください！」。創立者は即座に「激励の像」と命名してくださいました。学生たちは創立者にお礼を申し上げ、肩をたたき

合って大喜びでした。

そして滝山寮の前に、第一回滝山祭に続き、第二回滝山祭を記念してヒマラヤ杉を記念植樹していただきました。創立者が土を掛けられた後、私も学生の代表としてスコップで土を掛けさせていただきました。「来年もまた植えようよ」と創立者は言われました。

その後、私たちは創立者を滝山寮中寮広間の展示コーナーにご案内しました。第三回入学式の創立者講演「創造的人間たれ」を学び、大学の起源、世界の大学の歴史などのテーマでまとめた研究発表、創立者コーナー、また寮生による書や絵画からなる滝山ギャラリーなどを見ていただきました。

〔全寮将棋大会・将棋名人戦〕

続いて寮内の一室に創立者をご案内しました。そこで創立者は、第二回滝山祭記念の全寮将棋大会・将棋名人戦の優勝者と対局をしてくださることになっていたのです。

この将棋名人戦というのは、全寮企画の一つで、滝山祭の1週間前から東寮、南寮、中寮、北寮各寮の部屋代表がトーナメント方式で対局し、勝ち残った各寮代表がまたトーナメント方式で対局、そこで勝った寮生を名人とする、というものです。当時、全寮で52室、1室12人、総勢600人を超える寮生がいました。優勝者はその頂点に立った寮生です。

この優勝者の寮生が緊張の面持ちで創立者のいらっしゃる部屋に入ってきました。そしていよいよ、創立者と優勝者の対局が始まりました。寮生は真剣に考えながら、一手、一手を指しています。創立者は、居合わせた周りの人たちと談笑されながら指されています。私も見ておりましたが、創立者はいつ考えておられるのか分からないほどスピーディーに指されるのです。30分ほどたったころ、寮生は投了しました。

その時の創立者のお話が強く印象に残っています。「将棋だけでなく、すべての面で私に勝ってほしい。学問でも言論でも、全部私を凌いでほしい。それでこそ、私は安心なんです」。

私もおそばで伺っていましたが「何をやっても勝て」とのお言葉に、「創大生、成長しなさい」との創立者のお心が深く心に響きました。

〔創立者 学生のなかへ〕

将棋名人戦を終え、創立者は「学生に会いに行こう」と言われ、滝山寮の周囲に設けられた60店舗を超える模擬店や催し物に向かわれました。

最初に「滝山の滝」にご案内しました。これは、滝山寮の「滝」を実現しようと、6階建ての南寮の建物の屋上から、壁面に沿って水が勢いよく流れ落ちるように作られた“人工の滝”です。強力なモーターを取り寄せ、用意した水を自動的に巡回させながら滝を実現させ、暑い中で涼を取っていただくという趣向でした。

よく見える所に創立者にお座りいただき、私は滝の役員にスタートの合図を送りました。勢い

よくモーターの回る音が響きました。ところが、一向に水が流れ落ちてこないのです。リハーサルの時は、水が寮の屋上から勢いよく流れ落ち、大成功だったのですが。私は焦りました。「どうしたのかな?」。沈黙が流れました。その時です。寮の屋上にいた滝の役員が「水がありません!」と大声で叫ぶのです。滝に水が流れないことが分かったのです。

その時、滝の役員たちは大急ぎでバケツに水を入れ、屋上まで運び、人力で一生懸命に水を流し始めたのです。その姿が丸見えです。そこに居合わせた人たちから一斉に大きな笑い声と拍手が起きました。創立者も大笑いされながら手をたたいておられました。滝山の「滝」は無残にも失敗に終わるかと思われましたが、最後は知恵と執念で拍手を頂きました。

この後、寮生や大学の各サークル、教職員の家族が運営する模擬店や催し物などに、創立者をご案内しました。その時突如、四つん這いになって勢いよく走ってくる“クマ”が現れたのです。「何だ! あれは!」。しかし、どう見ても本物のクマでないことは分かります。よく見ると、人がクマのぬいぐるみを着て動き回っているのです。それが素早い動きで、滝山祭に遊びに来ていた子どもたちを喜ばせるための催し物の一つだったのです。創立者はクマの頭をなでられ、手綱を引いて歩かれる一幕もありました。

この日の最高気温は32.7度です。クマは動き回って疲れたのか、立ち止まってぬいぐるみを脱ぎました。そこには全身汗だくの、笑顔の寮生がいました。彼は創立者にごあいさつをしました。彼のユーモラスな姿をごらんになった創立者は大笑いをされ、「努力賞ものだね」と。その創立者の一言に、彼の目からは大粒の涙があふれました。

その時のことを創立者は、「あな楽し あな嬉しきや 滝山祭」と詠まれました。

さらに、創立者は各模擬店を一軒一軒回られ、学生を激励してくださいました。焼きそば屋さん、お好み焼き屋さんでは味見をされ、金魚すくいでは金魚をすくい、弓矢の催し店では、創立者の射られる矢が的を射るたびに、ギャラリーは大喜びで大拍手。はじけるような歓声が起きました。どの模擬店、催し物でも、創立者と学生との和やかな、楽しい交流が行われました。

創立者は、全ての模擬店を回ろうという勢いでした。何度も言いますが、この日の最高気温は32.7度。普通だったらへとへとになるほどの猛暑です。そうした中での、創立者の激励行でした。申し訳なさでいっぱいでした。

創立者は本当にお疲れになっていたと思います。しかし、創立者が足を運ばれると、各模擬店では「先生、色紙をお願いいたします!」と、学生たちは創立者をお願いするのです。創立者はすぐさま、その要望に応えられ、色紙を書いてくださいました。

その中からいくつかを紹介させていただきます。

うちわを100本、手ぬぐい100本を買われた南寮4号室の「涼風」というお店では、「滝山祭 わが校去っても 滝山祭」と詠まれました。

中寮3号室が営む「オアシス」というお店では、「満月も 滝山祭に 笑顔かな」

「月見草庵」という模擬店では、「青春は ここにありけり 滝山祭」

「君も立て 僕も立つぞと 滝山祭」

また北寮7号室の「かき氷屋さん」では、「かき氷 幼なじみの 歴史かな」と詠まれました。私たちは本当に金の思い出を、生命に刻む思い出をたくさんつくっていただきました。

〔創立者 陶器にご揮毫〕

日が暮れたころ、北寮企画のウランバトルという催し物に創立者が立ち寄られた時のことです。空には満月が輝いていました。モンゴルの人が住むパオという移動式テントを立て、中にはその居住空間が広がっています。そのパオのそばで、焼き物の展示会を担当している学生が、白地の素焼きの大皿と大壺を用意して創立者をお待ちしていました。

創立者が来られると、学生たちはその陶器に揮毫をお願いしたのです。

創立者はすぐさま筆を執られ、大皿に「わが弟子よ 人間の王者たれ」

大壺には「健康・栄光・英知・勝利・福運・情熱・正義 一九七三年 第二回滝山祭」と認められました。

さまざまなお話があった後、「天下というのは、一個人、一団体のものではない。民衆のものだ。『天下は 天下の 天下なり』』と言われ、そこに居合わせた全員で「天下は 天下の 天下なり」と大きな声で唱和しました。その声は辺りに大きく響きました。空には満月が煌々と輝いていました。

15日 滝山祭3日目

3日目の15日。この日も最高気温32.8度と暑い日でした。前日の猛暑の中、多くの学生に会って激励して下さった創立者は、大変にお疲れだったと思います。それでも学生の中へ入り、激励に汗を流してくださいました。

創立者はその時のご心境を『新・人間革命 創価大学の章』に、次のように書かれています。

「『滝山祭』三日目となる十五日も、伸一は、八王子市内で行われた法要に出席したあと、すぐにキャンパスに戻り、学生の激励に汗を流した。

前日、猛暑のなかを動き回った伸一の疲労は激しかった。

しかし、彼は自らに言い聞かせていた。

“私の体は、どうなろうが、徹底して学生を励まし抜く！ 学生を守り育てる教育者の姿勢に、微塵も、嘘、偽りの精神があってはならない。私は、学生を成長させるために生命をかける。その信念なくして教育などない”

教育の真髄とは、青年に尽くし抜く慈悲であるといえよう。」

〔盆踊り大会〕

この日の午後6時から中央体育館で、滝山祭の掉尾を飾って納涼盆踊り大会が開催されました。北は北海道から南は九州・沖縄までの盆踊りの曲に乗って、学生やその父母をはじめ教職員やその家族、市民らが多数詰め掛け、にぎやかに踊っていました。

その時です。創立者が体育館に入ってこられたのです。寮生から贈られた浴衣を着た創立者は、体育館の中央に設けられた櫓（やぐら）に上がられました。私たちは予想もしていなかっただけに、場内は驚きと歓喜に包まれ、大歓声と大拍手で創立者をお迎えしました。

創立者はマイクを取られ、スピーチをされました。

「ともかく創価大学は、人類の幸福と繁栄、世界の恒久平和をめざし、現代の世界に先駆を切っけて生まれた大学です。学生を根幹として教授、職員、理事が一体となって二十一世紀への船出をしている大学であります。昭和四十四年の大学設立の講演のなかで、私はあくまでも創価大学は学生の側にたつてつくる、学生を守り育てる、故に学生参加の原則を貫くと明確に宣言しておきました。この宣言だけは、創立者の精神として、また創価大学の理想を実現する不可欠の条件として決して忘れないで進んでいっていただきたい。」（創価大学創立二十周年記念出版——『創立者の語り』上巻「第二回滝山祭盆踊り大会」より）

「昨日、私は陶器をつくる展示会のほうへまいりました。そこでぜひ書いてほしいといわれまして、白地の素焼きの大皿に「わが弟子よ 人間の 王者たれ」と、もう一つの大壺の方には、『健康 栄光 英知 勝利 福運 情熱 正義』と書きました。

そこで私は諸君達に申し上げたい。」（同）と言われ、新たに次の七項目の指針を示されました。

『第一に 生涯、健康たれ』——。健康でなければ偉大な業績を成し遂げる事はできない。革命も成就できない。民衆の偉大なエネルギーを導き出していく源泉にもなれないからです。

『第二に 生涯、青春たれ』——。人間の偉さとは、所詮、青年の気概、青年の心を貫くことでもあります。また、人生を現出しゆく内なる生命は、若さであり青春でなければならぬ。満々たる青春の血潮なくしては後輩もついてこないし、やがて指導者になった場合も、防御的な、保守的な、ずるい仮面をかぶった人間になってしまう。故に私は、生涯青春であれと申し上げておきたいのです。

『第三に 生涯、栄光たれ』——。栄光とは太陽にたとえられるでしょう。太陽はこの地上がどのような嵐のときにも、重苦しい曇天のときでも、悠久の光彩を放ち続け、毎日毎日栄光の運行をしております。どうか諸君も、この太陽のごとき栄光の軌跡を惑わずに直進していただきたいのです。

『第四に 生涯、福運をもて』——。福運は指導者としての条件です。指導者に福運のない場合は、民衆がかわいそうであり、不幸です。ではその福運は何によってつくるか。それは、みなさんの胸の内にすでにあるとおりであります。即ち、生涯信じて悔いのない哲学・宗教の実践にあることはいうまでもありません。

『第五に 人生の勝利者たれ』——。人生は、闘争の異名ともいわれています。現実には証拠があり、諸法は実相です。未完成な青年期である以上、苦闘や辛酸を味わうことは数々あることでしょう。しかし、たとえ何回敗北したとしても、最後には絶対に勝利の実証を示す、人間指導者、革命児になるという一念だけは是が非でも生涯持ちつづけていただきたいのです。

『第六に 生涯、英知の人たれ』——。知は力です。英知なく知恵浅き人は、感情に左右され、環境に支配されやすい。偉大な指導者にはなれません。私は、創大生諸君が、豊かな知恵、輝く知性をもって、生涯、人のため社会のために活躍する偉大な人材集団であってほしいと訴えておきたいのです。

『第七番目に、生涯、正義の人たれ』——。この正義とは、一言でいえば正法正義の永遠不滅の大哲学をもつということです。人間精神を蘇生させる不朽の哲学を生涯たもつということでもあります。どうか諸君は混迷の時代に真の夜明けを告げる最終的なランナーであることを忘れず、それを最高の誇りとして、堂々と人間王者としての崇高な人生を進んでいただきたいのです。

今日はこの七点を諸君の将来のために申し上げておきたい。」(同)

創立者は「ここに、また一つ、創価大学の永遠の指針が生まれたのである。」と「新・人間革命 創価大学の章」に書いてくださっています。

創立者はスピーチを終えられると、「さあ、それじゃ楽しくやろうよ」と言われ、檜の上で率先して盆踊りを始められました。学長や理事長も続き、檜の上のメンバーも場内の参加者も全員が踊り始め、体育館内は、にぎやかな盆踊りの曲と大勢の人の踊りが一体となって大きなうねりとなりました。参加者は創立者と一緒に踊る喜びにあふれていました。

その時です。創立者は「太鼓をたたこう」と言われ、太鼓の役員から太鼓のバチを受け取り、打ち方の手ほどきを受けると、力いっぱいたたき始められたのです。何と、創立者がたたかれる太鼓に合わせたの盆踊りが始まったのです。滝山寮の踊りである「滝山音頭」や「東京音頭」「炭坑節」など何曲もの全国各地の盆踊りの曲に合わせて、創立者のたたかれる太鼓のリズムに乗って全員が踊りました。

まさに“想定外のビッグイベント”です。場内の参加者は、創立者の太鼓のリズムに合わせて“歓喜の舞い”を続けました。創立者の浴衣は汗でびしょりでした。創立者のたたかれる太鼓の音が一人一人の生命に深く響いていったと思います。誰もが生涯、忘れられない一時だったと思います。

創立者の太鼓演奏が何曲も続き、たたき終えた時です。おそばに待機していた私は、創立者の手の（親指のつけねの）皮がむけているのに気付きました。「あっ」と思わず声が出るほど、本当にびっくりしました。急いで連絡をして運ばれてきた絆創膏を受け取り、創立者の手の皮のむけた箇所には張らせていただきました。ここまで私たちのためにしてくださる創立者への感謝の思いと申し訳なさでいっぱいでした。

創立者はこの時のことを『新・人間革命 創価大学の章』に次のように書かれています。

「さらに、伸一は、太鼓のバチを手にし、打ち方の手ほどきを受けると、学生たちの生命に轟けとばかりに、力いっぱい叩き始めた。今度は、伸一の太鼓に合わせての踊りとなった。『東京音頭』や『炭坑節』など熱こもる太鼓演奏が何曲も続いた。

伸一の指のつけ根に痛みが走った。皮が剥けていた。

それでも、もう一曲、もう一曲と、太鼓を叩き続けた。少しでも皆に励ましを送りたかった。叩き終えた伸一の手を見て、滝山祭の実行委員長が、慌てて絆創膏を用意し、張ってくれた。」

私が創立者の手に絆創膏を張らせていただいた時、創立者はにっこりとほほ笑まれました。

創価大学の歴史に残る、この三日間にわたる第二回滝山祭で、創価大学に集った学生を命懸けで激励し、育成しようと激闘を重ねられ、人間教育のあるべき姿を示された創立者のお心とお振る舞いを、私たちは永遠に語り継いでいきたいと思います。

〔月見の宴〕

普通ならば、この感動的な盆踊り大会をもって第二回滝山祭は終了した、となるのですが、この盆踊り大会の後も、創立者は学生のために、さらに激闘を続けられました。

創立者は「私はこれから、役員として奮闘してくれた諸君とお会いしたい」と言われ、大学の屋上で「月見の宴」を催してくださったのです。参加したのは、整理役員や警備の役員など滝山祭を陰で支えた100人ほどのメンバーでした。

創立者は「陰で献身してくれる人びとの労苦に、いかに報いるか——その心遣いに人間主義の哲学がある」と教えてくださっています。

「月見の宴」が始まる前に、大学の屋上のそばにある一室で、創立者は、これらのメンバーと懇談をしてくださいました。創立者はさまざまなお話をされ、個人に対してもご指導があり、私も生涯忘れられないご指導を頂きました。懇談が終わったころ、「準備ができました」との連絡が入り、それを聞いて皆、立ち上がり「月見の宴」の会場に向かったのですが、私もみんなと一緒にしようとしたところ、創立者が「君は僕を案内していくんだろう」とおっしゃいまして、部屋にはとうとう創立者と二人だけになってしまいました。

間もなくして、創立者が「さあ行こうか」と言われたので、創立者をご案内して会場に向かいました。ところが、途中で、創立者は立ち止まられたのです。そして夜空に輝く満月をご覧になりながら、創立者が言われた言葉が忘れられません。

「いい月だな。本当に満月だな」「勝ったな」とおっしゃいました。私は「はい。ありがとうございます」と御礼を申し上げました。私は創立者のお言葉がうれしくて、感動が込み上げ、満月がぼやけて見えました。

創立者は「じゃあ、行こうか」と言われ、私は「月見の宴」の会場へ、創立者をご案内いたし

ました。

会場には100人ほどの学生が、うれしくてしょうがない、というような笑顔で待っていました。夜空には満月、辺りには学生の弾く琴の音が流れていました。

創立者が椅子に座られ、「月見の宴」の開始です。

最初に「こういう時はみんなで句を詠もう」と提案され、皆に紙と鉛筆が配られました。

創立者はすぐに一句を詠まれました。「晴れやかに 名月ほほえむ 滝山祭」

しばらくして、なかなか句ができていない私たちに対して創立者は、「さあ、できたかな。句というのは、一瞬が勝負だよ」と教えてくださいました。

それから、改まった口調で創立者は、参加者に次のように語り掛けられました。

「責任者、リーダーというのは、人の苦勞を背負う人のことです。そういう決意、哲学をもった指導者が出なければ、本当に人びとに尽くし、社会を変えていくことなどできない。今の世の中は、多くの指導者が、みんなエゴではないですか。／平和のため、民衆のために、私は立ちます。諸君も、厳然と、二十一世紀の勇者として立ってください」(『新・人間革命 創価大学の章』)

それから創立者は、一人の学生に、笑いを含んだ声で「君は、ぼくが講演をしていた時に、居眠りしていた人だね」と言われました。一瞬、皆、緊張しました。「自分にも覚えがある」という雰囲気です。学生たちは皆、いくつもの役割を担いながら、前日、いや当日の朝まで、寝ないで滝山祭の準備をしていました。創立者に声を掛けられた学生だけでなく、居眠りはしていないものの「自分もその一人になった可能性は十分ある」と思う人が何人もいたと思います。まさにそういう緊張感が漂いました。

そして創立者は、その学生に「大勢いるから、わからないと思うかもしれないが、結構、目立つものなんだ。見えないところでも、一生懸命で誠実であろうとすることが、人生では大事だよ」とご指導されました。そして創立者は「では、今日を記念して君に一句贈ろう」とその学生に言われ、「名月に 師弟はきびし 滝山祭」と詠まれました。

創立者の心が、そこに居合わせた全ての人に染み渡る、厳しくも温かい月下の語りでした。

月見の宴が終わりに近づいたころ、創立者は「それでは、寮に帰って、ゆっくりお休みください。私は、これから原稿がありますので、お先に失礼します」と言われました。

創立者は、私たち以上にお疲れになっているのに、この後も原稿を書かれる。申し訳なきでいっぱいになりました。創立者は次の戦いを始められたのです。

私たちは、創立者への感謝と、創立者に生涯かけてお応えしていく決意を胸に、「ありがとうございました」と皆で御礼を申し上げました。

創立者に大きく包まれ、3日間にわたった第二回滝山祭は、ついにエンディングを迎えました。以上、全てをお話しすることはできませんでしたが、私が体験し、私が見た第二回滝山祭と申し上げたいと思います。

草創のころの話をさせていただきましたが、決して単なる昔話をしたつもりはありません。創立者を求め、創立者と共に、世界平和の決め手となる我が創価大学を建設していこうとする草創期の学生の精神が、未来にわたり脈打っていくことが創大建設の核心にあるべきだ、との信念から話をさせていただきました。そして、私たち学生を命懸けで、徹して激励される創立者のお心、お振る舞いを、私という一人の学生の目を通して話をさせていただきました。

私たち創大生がさらに母校・創価大学を発展させ、創立の目的を達成していくためには、創立者のお心を、もっともっと知らなければならないと思います。

ここで、さらに、創立者のお言葉を確認したいと思います。

「私も、学生を守り、育てるために命をかけてきた。

時には、玉の汗を流しながら、また時には、体調を崩していても、学生のなかに飛び込んで対話を重ねてきた。

学生が成長するのなら倒れても本望だと思った。

それが『教育者』の信念であるべきではないか！

それが『学生中心』の創価大学における、教職員のあるべき姿ではないか！

三日間にわたった、第二回滝山祭では、灼熱の太陽が照りつけるなか、全身汗まみれになって学生たちを激励し続けながら、こう語ったことを覚えている。

『私は学生の味方です。徹底的に動き、徹底的に激励に走る。この五体が、たとえ動かなくなろうとも、私は学生を守るために働きます』

これが、今も変わらぬ、そして生涯変わらぬ、創立者の心情である」（随筆『平和の城』「創価大学 創立の心」より）

さらに創立者のお言葉を確認したいと思います。

「いかなる組織であれ、創立者を大事にし、創立の精神を継承しているところは、清々しく栄えている。行き詰まりがない。私が共に対談集を発刊したモスクワ大学のサドーヴニチイ総長は語られた。

『本学は、創立者ロモノソフの思想と道徳的規範を体現する大学です。時を経れば経るほど、創立者と大学とのつながりは、ますます深まっています』と。

ここに、創立二百五十年を貫く誇り高き伝統があり、発展の原動力があった。」（『栄光への指針』「創立の魂よ 永遠なれ」より）

「『創立の精神』とは、抽象論でもなければ、観念論でもない。詮ずるところ、『師弟の精神』こそが、『創立の精神』と完璧に合致するのだ。」（『栄光への指針』「創立の魂よ 永遠なれ」より）

「原点を持った人は強い」「迷ったら原点に返れ」との創立者の指針もあります。私はその「原

点」を創価大学の時代につくらせていただきました。本当に感謝の念でいっぱいです。

「原点」ということについて、創立者は次のように述べられております。

「芸術家であれ、思想家であれ、経綸の人であれ、多くの一流の人物というものはその人生を決定づけたそれぞれの不動の原点、光源を、生涯、胸中に抱いております。彼らの一生は、ある意味で、その原点を確認し、行動の中で実証していった『原点への旅』であったといっても過言ではない。その『一もって貫く』信念の翼が彼らを人間としての偉大の高みに運んだのであります。」(創価大学創立二十周年記念出版——『創立者の語らい』下巻 「第十二回創価大学卒業式メッセージ——自己の原点を深め続けよ」より)

以上、創立者の指針を、いくつか確認させていただきました。

最後に、今日の表題に掲げました、第二回滝山祭のテーマ「創立者と共に 創立者の精神で」に関して、少し申し上げたいと思います。

今年(2011年)入学の創大生、創価女子短大生は、3・11東日本大震災のため、4月に入学式が行われず、5月5日に「新入生の集い」があり、創立者がメッセージを下さいました。その中に、次のような一文があります。

「ともあれ現在、対談を重ねているモスクワ大学のサドーヴニチイ総長とも一致しましたが、大学と創立者の命は完璧に、また永遠に一体不二であります。私は、いつでも厳然と皆さんを見守り続けております」

この一文は、創価大学に学んだ私たちの立場に置き換えて考えてみると、どのようになるのでしょうか。すなわち、私たちの生命が創立者の生命と完璧に、また永遠に一体不二であってこそ、創価大学に学び、生き抜く“私たち創大生”の存在意義があるといえる、ということになるのではないのでしょうか。表題に掲げた、「創立者と共に 創立者の精神で」というテーマは、このことを表現しようとしたものだと思っております。

生涯、「創立者と共に 創立者の精神で」、創大生として生きて、三大モットーの教育、文化、平和に貢献していきたいと思っております。そこにこそ、創価大学に学んだ一人としての誇りがある、と私は確信しております。

きょう、母校・創価大学の草創のころの話をさせていただくことによって、私の「原点への旅」をさせていただきました。これからも、死ぬまで「原点への旅」を続け、創大生として生き抜いていく決意です。

とりとめのない話になってしまいました。以上で私の話を終わらせていただきます。

ご清聴いただきまして、本当にありがとうございました。